



TITLE:

月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考證(下)

AUTHOR(S):

内田, 吟風

CITATION:

内田, 吟風. 月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考證(下). 東洋史研究 1938, 3(5): 401-423

ISSUE DATE:

1938-06-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145627>

RIGHT:

月氏のバクトリア遷移に關する地理的年代的考證(下)

内 田 吟 風

五、月氏西遷の經路(上)

月氏は上述の如く、西紀前一三三より一二九の間に、イリ地方を放棄、西方オクズ河北に移住して大月氏國を建てたのであるが、其時月氏の通過した土地が大宛國であつた事は、史記大宛傳・漢書西域傳・荀悅漢紀等の明記する處であり、而して其大宛國が大體今日の Fergana 地方に當ることは、既に定説である。^①

然乍ら同國の詳細なる四周、都城の所在等に就いては今日猶問題を殘して居るものであり、而も之は大月氏國の所在比定の上にも大なる影響あるものである。

尤も此の問題を決定す可き史・漢の記事は總て張騫が中亞にさせる以後即ち大月氏が既に中亞に大國を建設した以後の事實を記したものに外ならないから、月氏の大宛通過其時に於ける大宛の狀態を知ることが理論上不可能なのである。従つて本考證の目的も、嚴密に申せば大月氏建國後の大宛國の都城・四邊等の狀態を明かにし、是を以て一は月氏通過時の大宛も亦略此の如きであつたらうと推察し、一は之を以て大月氏國其物の位置決定の一材料と爲すに在るのである。

(1)、大宛都城の位置 史記及び漢書に見ゆる大宛の都を以て、今の Kasan に當り可きか、或は Khodjend に當つべきかは、容易に決定し難き問題である (Kokand, Uratiub 或は Akhsi-Kath に求めんとする考の妥當なら

ざるは既に充分論ぜられてゐる處であるから、茲には觸れない。往年恩師桑原博士がコージエンド説を白鳥博士がカサン説を各々強調せられ、數次の論争ありしも遂に何れとも決せなかつたのは周知の事實である。

當時、其論點は極めて多岐に亘りたるも、然れども此宛都問題を完全に解決せんには一に史記・漢書に記されたる宛都の地勢に何れが好く一致するかを判斷するに在り、而して其は現在に於ては大體

〔第一〕 貴山の音に近き名を有すること。

〔第二〕 休循より西北九百二十里（以下里と直記す、
るは總て漢里）、捐毒より西北千三十里の地點たること。

〔第三〕 烏孫より西南約二千里の地點たること。

〔第四〕 奄蔡の東南二千里なる康居より更に東南約二千里

〔第五〕 漢の貳師將軍の宛都征伐に於ける戰況と合致する情勢の都市たること

の五個の條件に何れがより宜く合致するかを判斷することである。然るに、

〔第一〕 コージエンド及びカサンとの兩者が共に貴山（城）の古音に近いものであることは、既に白鳥博士の論證、桑原博士の考證によつて明である。然し其以上、この中の何ちらが貴山の古音により近いかによつて問題を解決せんとすることは論理上妥當でない。従つて之によつては兩者の何れかを決定する譯に往かぬ。

〔第二〕 漢書西域傳を檢するに

（捐毒國）西北至大宛、千三十里。（休循國）西北至大宛國、九百二十里。

とある、捐毒は今日のイルケシュタム、休循はアライ高原である。^③

史記漢書が諸國間の方向距離を擧げたるは皆其國都間の事を謂へるなりと見るは定説である。従て本傳文を以

て貴山城を求むればコージエントはアライよりも將又イルケシュタムより殆ど正西に當りて、西北なる字面に合せぬ。然るにカサンは全く西北に當る。

而もこの千三十里と九百二十里の距離は、イルケシュタム・アライ高原とカサン間との距離に殆ど一致するのである。(同地間にはアライ山脈が横はつてゐるから、實距は平面距離よりも遙かに長く、其峠を越えて進んだ漢使等が千三百里九百二十里(一漢里は約四百米)を數へたのは當然と考へられる。)

〔第三〕 史記大宛傳を検するに

烏孫、在大宛東北可二千里

なる一文の存するのを發見する。即ち上述の如く史漢の諸國間の距離方向は其國都の事を謂へるものであるから之に據りて貴山城は烏孫の都赤谷城の西南約二千里の地點に在つた事を認めねばならぬ。

然るに烏孫の赤谷城は、イシツククル湖よりも遙かに東方なる *Naryn-Kol* 附近に在つたものであるから、^④從來の通説の如く、赤谷城を以て *Uch-Turfan* より *Bedel Akbel* 峠を北に越えたるナリン上源域、或はイシツクル東南隅岸に求むるは妥當でない。其より西南二千里の都市は、カーサーンであつて、ホジエントではない。

(烏孫より大宛に至るには、ナリンコルよりイシツクルの南又は北岸を西進 *Fruse Kashgar* 道をナルインスクに於て西南に横斷、葱嶺の一部フェルガン連峯を越えて達す可く、大宛と漢との交渉史上屢々名を現はす大宛の東邊城郁成は蓋し此道上に置かれしもの (*Terek Ugen*) であらう。

〔第四〕 史記大宛傳に

康居、在大宛西北可二千里。

奄蔡、在康居西北可二千里。行國。與康居大同俗。控弦者十餘萬。臨大澤無崖。蓋乃北海云。

の二條あり。若し大宛の都貴山城をコージエンドとせば、其西北可二千里なる康居の都は全く、地表に鹽の置かれたる不毛のキシルクムの沙漠中に存することとなりて、強大なる康居の實情に即せぬ。然るに之をカサンとせば、シルダリヤの東チムケンド・ツルケスタン附近が康居の都となりて極めて適應するのである。奄蔡が西史に見えたる Aorsi, Alani なることは、定説であり、其が臨める無崖の北海とはアゾフ海なるべきことも亦疑無き所である。而して奄蔡は三國志所引の魏略によれば東北に於ては康居に接したが、西方では大秦に接したものであるから、其國勢(擴張者十餘萬)より見て、國都をアゾフより、餘りに遠く東方の地點例へばアラル海以東等に求むるのは不穩當であるから奄蔡より東南二千里なる康居より、更に東南二千里なる大宛の都城はカサンこそ其條件に合しこそすれ、コージエンドに於ては全く適合しないと申さねばならぬ。

〔第五〕 史記大宛傳(及び漢書李廣利傳)中

伐宛凡五十餘校尉、宛王城中無井。皆汲城外流水。於是乃遣水工、徙其城下水空、以空其城。……(貳師)乃先至宛、決其水源、移之。則宛固已憂困。

なる一節がある。是は漢貳師將軍李廣利が武帝の命で大宛を攻めた時宛城に井無く、城旁の流水に依存せるを知りて、其の水源を決して之を移し、以て城中を涸渴せしめたことを云つてゐるのである。(「其川を干して城下に得て井を掘りて凌げることを記せること等よりして誤なるは、殆ど定説となつてゐる。」)

即ち貴山城は城旁に用水の供給をなす流水を有せる地でなければならず、而も其は漢の水工が水源を決し、之を移すことが出来た程の細流でなくてはならぬが、之に對しても亦、カサンのみが適應する。何故ならばカサン

はシルダリアの支流なる同名の細流にのみ臨むに反し、コージエンドはシルダリア本河の巨流（コージエンドに於ては二七〇米の幅員となり、ベコワツキイルパロ）に沿ひて、到底如何なる力を以てする共之を渴塞することを不可能であるからであらうと稱せらるゝ激流をなす）

（尤もコージエンド説を堅持せられたる桑原博士は、シルダリア本河の水は涸渇して、コージエンド市民は別に之に注入する域の支流 Khoja Bakaran の水を使用すれば、李廣利が渴塞せる細流はこのコージヤバカルガンであると見得べしと論ぜられたるも、平時に於ては兎も角、戦時に於ては如何ぞ多少の涸渇を嫌ひて猶之を用ひないであらうか。宛城が僅三十日（一に四十日）を以て降伏せる主要原因は矢張り水源喪失（漸く漢人を捕へて井戸を掘つたが）による涸渇と考へられる。之等から見ても貴山城は假令涸渇して居ても水に無盡蔵のシル本流に沿へるコージエンドであつたとは到底考へられない。）

唯、茲に一應考へねばならぬことは(a)史漢共に此宛城攻撃に關し、貴山城の名を現はして居ない、(b)李廣利は貳師城を破つて善馬を得る使命によつて貳師將軍の號を賜つたもので、彼は宛城を破りて所期の善馬を得た(c)而して彼李廣利が攻撃した宛城が王都であつたことは數個の理由より明である。以上三個の事情を綜合せば李廣利の大宛征伐當時は貳師城が王都であつて、漢書に宛都を貴山城としてゐるのは、其以後に王都の遷移があつたと考へられることである。

然し成る程廣利は貳師城下に到りて善馬を取る使命により貳師將軍の號を賜つたものであるが、然し彼の使命は其のみでは無い。大宛の貴人が降伏を議せる言（大宛傳）や、武帝が廣利の旋凱に當りて下せる詔に

危須以西及大宛、皆合約殺期門車令・中郎將朝及身毒國使。隔東西道。貳師將軍廣利征討厥罪、伐勝大宛。云々とあるによりても、實に彼の最終目的は王都を陥れて大宛の罪を正すことに在つたのである（之は匈奴征伐に祁連山攻略目的の地を附した號を受けた漢將でも最終目的は單于庭に在つたのと同様と思はれる）。従つて貳師將軍が攻めたからとて王都が必ずしも貳師城であつた證にはならぬ。又宛城を陥れて所期の善馬を奪つたとて、これは漢の大軍來ると聞けば其屬邑等（大宛の屬邑七十餘、貳師城も其一か。）

の人畜は攻掠を避けて王都に集結するのが當然で、従つて王都を破つて善馬を得たからとて之又必ずしも其王都が貳師城であつた證據にはならぬ。殊に廣利の征討以後に大宛の王都が遷移した如き事跡は全然史漢に見えないのであるから、宛都は最初から貴山城であつたと見るのが斷然穩當である。然し乍ら假りに百歩を譲つて廣利の大宛征伐當時頃迄の、即ち史記が記するしてゐる處の宛都が貳師城だつたとしても、之亦結局第三・第四及び本第五の比定條件よりして矢張りカサン以外には之を求め得ないではないか。

要之、以上五ヶの理由よりして史記漢書に見ゆる大宛の王都は之をカサンに求めるのを最も妥當としなければならぬと思ふ。

【第五節註】

- ① 大宛國の大體の位置が、今のフェルガナなるは、Desguignes, Rémusat 氏の論考以來定説となり、疑の餘地なし。嘗て v. Richtofen は漢書西域傳に見ゆる休循國を以て葱嶺の西 Osh. Nainangun. Khokan を含むフェルガナ盆地に存せしものとし、従つて大宛はフェルガナの西部のみと其以西の地なりと論じたが (Richtofen, China Vol. I, S.450 Ann. 2) 休循國は決してフェルガナに非ずして、Altai 高原に求む可しとの論證 (白鳥博士「西域史上の新研究」東洋學報三、桑原博士「藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む」藝文七) 出づるに及び其根據を失ひ、今日に於ては大宛の大體の位置をフェルガナに當つることに對しては殆異論無し。尙 Chavannes, Les pays d'occident d'après le Wei-lïo (Young-pao Ser. I Bd. VI, S.555, Ann.4) の休循 = Karalegin 説の妥當なるものも上掲二論にて明である。

- ② 桑原博士は此の外に三つの決定條件を擧げられた。即ち(1)フェルガナ地方に在つて最も古く、西紀前二世紀には既に重要な位置を占めた都市たることは、コージエンドは Baber の記錄に同市はフェルガナ地方に於て最も古き來歴を有する都會であると云ふ注意書があるので、稍よく適應する。然しカサンも亦 Tabari によれば八世紀初頭既に重要な都會と

して同教徒に知られてゐた。だから Baber の注意書が無いとて必ずしも古い都會でないとは云へぬ。要するに本條件は他の條件に比して軽く、積極的に兩者の當否を決定し得るものではない。(2) 史記大宛傳に、大宛の都から大夏の都藍市城との距離が二千餘里とあるから、此條件に合す都市でなくてはならぬこと、は嬌水の南の大夏より近い嬌北の大月氏と大宛の間を同傳が二三千里と記してゐることよりして、最も信ず可らざる數字として之は用ひる譯にゆかぬ。(3) 漢書西域傳に據ると宛都貴山城は休循國より大月氏に至る道筋に當つてゐた筈であるから此條件に合せねばならぬ、は結局カサン・コージエンド兩者中の何れかを決定するものではない。何故ならば現在でこそアライよりサマルカンド方面に到るにはオシニよりシルダリアに沿ひてコージエンドを経る直道あるも、古代に於ては必ずしもこの道が取られたか否か不明で、カサンを迂回して經るものであつたかも知れぬからである。(殊にシルダリア上流は現在でも舟筏の便少くコージエンド附近はペコワツキイパロウギの急流にて舟筏全然不能である)。

要之、以上三條件はコージエンド・カサン二市の中より一を擇出する條件には事實上なし得ないと考へる。

③ 白鳥博士(同上論文)。但し、水經注二が捐毒に出ずとする一水は Valhsch 河と見ねばならぬから、捐毒はキジルス・バフシニ河源流地に跨れりと考へられる。(第七節註6参照)

④ 烏孫赤谷城の位置 烏孫の赤谷城を、イシククル湖畔より遙か東方なるナリンコル附近に求む可きことには貳個の巨證あり。第一は、烏孫康居の境界はイシククルの西端よりも東に存したるが、赤谷城は、其境界より更に千里の東に在りたることである。漢元帝の時、匈奴の郅支單于是康居に移り住み、タラス上流域に築城猛威を四隣に振うたが、其時の事として漢書陳湯傳に

(郅支)擊烏孫、深入至赤谷城、殺略民人、毆畜產、烏孫不敢追、西邊空虛、不居者且千里。

とあり、郅支が屢々深く烏孫の赤谷城に迄押寄せて掠奪を擅にした爲、西邊千里の地は烏孫の民の住する者無きに至つたことを示してゐる。即ち之に據りて見るに、烏孫西邊は千里乃至其以上あつた譯で、詰り赤谷城は康居・烏孫の疆界より約千里以上の奥地にあつたと見ねばならぬ。而して該傳は次に漢將甘延壽・陳湯の郅支征討を記し

引軍分行、別爲六校。其三校從南道、踰葱嶺、徑大宛。其三校、都護自將發溫宿國。從北道、入赤谷、過烏孫、涉康居界、至闐池西

と云ふ。是は前後の事情より稽ふるに、延壽等は漢胡の兵四萬を發して、溫宿國即ち Uch-Turfan に勢揃ひし、一軍は嶺を越え、大宛を經、一軍は陳湯の計畫通り烏孫の衆兵を咸從すべく烏孫の都赤谷城に出で、烏孫の地を通過、康居の界を涉つて漸く闐池 (Tenuu・イシククル湖) の西に出でたことを謂へるものであつて、康居烏孫との境界はイシククルの西端、或は其より少しく東寄りに在つたことを示してゐる。此の事と、前の赤谷が康居の境より千里以上も東に存したことを併せ考ふれば、赤谷は決してイシククル湖東南岸 (此は烏孫の極めて豐饒なる牧地として存したと思はる) や、ウチュトルファンよりベデルを經て達するナリン河源地には非ずして、之を東方ナリン・ール附近の地域に求めざる可らざることを認めねばならぬ。

第二に、赤谷城は溫宿國即ちウチュトルファンよりも、漢の都護府即ち烏壘 Chaili に近い。漢書は赤谷城を溫宿國の北六十里と記してゐる (故に若しも赤谷城がウチュよりベデルを越せるナリン河源城又はイシククル湖畔ならば、其都護よりの距離は溫宿よりも六十里遠い筈である)。然るに溫宿は二千三百八十里、赤谷は千七百二十里で、赤谷は溫宿よりも都護の治所に近いのである。即ち赤谷は溫宿の北六一〇里の地で而も溫宿よりも都護へ近い地である。この條件に合するものは、ナリンコル附近を措いては他に無い。即ちナリンコルはチャデルより北道を西進し、Ed. より西北に別れてムサルト峠を經て達すれば、ウチュに至るよりも近いのである。漢書が溫宿、赤谷間を六一〇里とせるは、ウチュ・阿克苏・ムサルト・ナリンコルの距離を謂へるものと考へられる。(新唐書所引の賈耽皇華四達記に見ゆる路は、ベデルを越えて達する迂迴路で、從つて此は六一〇里を遙に超過する筈である。尤も此唐書所引四達記の路程を計算すると溫宿・赤谷間が却つて僅に一二〇里となるが、之は唐書編者の不注意なる抄錄の結果と考へられる)。

要之、以上第一・第二の理由よりして烏孫の赤谷はナリンコル附近に求むる外無い事明であると思ふ。

⑤ F. Hirth, Über die Wolga-Hunnen und Hiong-nu. Mr. Kingsmill and the Hiong-nu. 佐 J. Marguart, Untersu-

chungen zur Geschichte von Iran. 其他により同説は小部分の訂正を加へらるべきも、大局に於ては全く正しきこと、拙文「匈奴西移年表」フン＝匈奴に關する再考察」(東洋史研究二の一。三二—三三頁)参照。

⑥ 唐書は貳師城を後世の蘇對沙那今のウラチュープと謂ふ。若し然れば貳師城は嘗て史記時代に於ても亦宛都たりし事なかつた(最初から貴山城が都であつた)と謂はねばならぬ。何故ならばウラチュープは宛都比定の第三・第四に少しも合せぬから。もし本文の假定の如く史記時代貳師城が宛都であつたとせば、唐書の貳師ウラチュープ説は誤傳である。何故なら史記時代の宛都は比定條件第三・第四・第五に適合す可きに不拘ウラチュープでは全く之に適合しないから。

六、月氏西遷の經路(下)

(2)、大宛國の四周 大宛國が其南邊に於て Alai 山脈を以て捐毒 (Irkestam) 及び休循 (Alai) の兩國に、又東邊に於ては Fergana 州と Semirechensk 州との境界を以て烏孫と隣りせりとなす白鳥博士「大宛國考」(五頁)の考證は殆ど不動と謂ふ可く、唯後魏以後破洛那フルガナ(拔汗那・鑠汗)國を以て故の大宛となすと共に、休循(渠搜)の地となす考が史乘に明記せられてゐることを考慮せば、昔時休循の版圖は幾分アライ山脈を越えてフェルガン盆地の一部に延びてゐたことがあつたと認む可く(尤もリヒトホーフエン(第五節註第一)の如く、休循をフェルガナ其物なす考の妥當ならざ)、其東界は Uzbekistan と Kirgistan との自然の境界 Ferghankette によりて遮蔽せられたれば、大宛・烏孫の交通は其 Terck Pass (上述の如く大宛東邊の城都成はこの峠)を通じて行はれたと推察せられる。又は Ugen にても置かれたものか。)

問題は北境及び西境である。先づ北境に關して之を考ふるに、白鳥博士が「大宛國考」に於て

「次に大宛國の北界を考へんに、史記の大宛傳を案するに、その一處に「其北則康居」とあり、また一處に「康居在大宛西北可二千里……與大宛、隣國」とあり、更に漢書の西域傳大宛國の條によれば「北至康居卑闐城千

「五百一十里」と見えたり。此等の記事によりて大宛國は北方と西北方とに於いて康居と隣接せるを推知すべし。而して康居が烏孫國と今の Tanaigir 山脈を以て相接し、その領域は東方に於て Cu 及び Talas 二川の流域を包容し、西方に於いて Turkstan, Tchinkend, Taskend 等を領有せしこと已に康居考に詳説したる如し。されば大宛國と康居國とは今の Kuram-tau, Chotkal-tau, Ala-tau 等の諸山脈を以て境界を接せしこと疑を容るべからず。」

と、せられしは、概勢に於て全く妥當である。然し唯其西北邊に於て、稍南方に過ぎたる感無きに非ずである。何となれば、同博士はタシュケントを以て（大宛の領となす史料を否定し却つて）康居の領土となし、大宛の北境は從つて其よりも南方に存したるものなりとせられしも、タシュケントは、漢代に於ては康居の領地に非ずして、却つて大宛の北鄙であつたと認めねばならぬからである。即ち通典（一九三）には

石國、隋時通焉。居於藥殺水。都柘折城。方千餘里。本漢大宛北鄙之地也。

とあり、同書所引の杜環經行記には

其（石國）國城一名赭支、一名大宛

とあり、又唐書西域傳には

石、或曰柘支、曰柘折、曰赭時、漢大宛北鄙也

とあり、而して此の石國（柘支・赭時）がアラビア人の所謂 Sak 即ち今のタシュケントに他ならぬは最早定説であるからである。

斯様にタシュケントが漢代大宛の北境地方であつたこと明白なるに不拘、從來この地を康居の地なりと誤認せ

られ來つたかと云ふに、斯は一新唐書西域傳が漢の康居五小王の故地に關する全く出鱈目の記事を掲ぐるに生ぜしものに外ならぬ。元來宋代の撰たる新唐書西域傳に依據して、唐代の通典・經行記を棄つることの妥當ならざるは勿論なるも、更に具體的に同唐書西域傳を検討するに、其の康居小王故地の記事の荒唐無稽なるは、史記大宛傳に

及宛西小國驩潛・大益。宛東姑師・杆朶・蘇薤之屬、皆隨漢使獻見天子、天子大悅。

と大宛即ちフェルガナの東に存せりと明記せられし康居の一小屬國蘇薤(恐らくナリンスコの北寄の地ソソクルの附近?)を以て、史、或曰佉沙、曰羯霜那、居獨莫水南、康居小王蘇薤城故地。

と云ふ如き愚なる誤を犯してゐるに徴しても明で(史國はKechi即ち今のShahr-Sebz、是れが信憑す可からざるで、フェルガナの遙か西南にある。)宋代の記録たるは論を俟たぬのである。

斯様に新唐書西域傳中の康居小王故地説は出鱈目の宋代文献であるから、之を以てしても其石國(タシユ)を康居小王竄匿王の故地と爲すの信憑するに足らざるを推知するに難くないが、更にこの石國の一條のみに就いて觀察しても、之がヤクザルテス(藥殺水・葉河)沿岸のタシユケント(石國)の事を記し乍ら、突如として東方のチュ(素葉水・碎葉水)流域或はイシククル(熱海・呼)果てはタラス(怛羅)の事を混記し、之等の中へ「故康居小王竄匿城地」の一節を竄入を見(素葉河云々の文句より見、竄匿王の地も亦チュ河附近にあつたかと思はる。樂越陞・竄匿の匿はgag(山)を示すものか。)愈々以て唐書の康居小王故地説の信憑ならざるを暴露してゐる。

之を要するに唐代の石國(タシユ)が漢代に於て康居の地であつたことは何等證據無い處、寧ろ通典等に従ひて大宛の西北隅邊を此地に求むるを最も妥當としなければならぬ處である。^④

次に西邊の決定であるが、既に上述の如くタシケントが大宛の北鄙であること確實ならば、其より南方の地方、即ちタシケントよりコシユクルガン・コージエンド・ウラチユーブに至る大道に沿へる地方は當然大宛の版圖でなくてはならず、従つて大宛の正西邊はシルダリア(ヤクザ)を以てギシルクムの大沙漠に面するものであつたに相違ない。史記大宛傳に見ゆる「宛西小國驪潛・大益云々」は此の沙漠を越えし西方の國(Chorasmi)を謂へるなる可く、又

〔大宛〕 西則大月氏、西南大夏(史記大宛傳)

〔大宛〕 北與康居、南大月氏接。(漢書西域傳大宛國ノ條)

〔大宛〕 西南至大月氏、六百九十里。(同上)

等によつて、大宛は西邊南部に於て大月氏と接續してゐたこと(上掲傳文には南大月氏接とあるも正南邊は上述の如くなれば、是は後述の如く西邊の南部に於て接せることを示すもの)、而して大宛の都なるカサンより大月氏の都への距離は僅かに六百九十漢里程(其數は勿論精密なものではないが都護より大宛・大月氏の距離の差を數へても七百九里に大體其位の近距離にあつたと見ねばならぬ)であつたこと、従つて大宛・大月氏の境、即ち大宛の西南境は宛都カサンより約七百漢里(漢里は約四百米)の地點(阿ラビア記錄に見ゆる Sirtusana)以内に存したことを認めねばならぬが、史記正義所引の括地志(及び通典)を檢するに、唐代の率都沙那(即ち今のウラチユーブに關して)

率都沙那國、亦名蘇對沙那國、本漢大宛國

と明記してゐるから、之を正しきものとせば漢代大宛の西南境は少くとも今のウラチユーブに迄は延び、茲に大月氏と接して居たと見ねばならず、従つて漢書の六百九十里の距離は稍過少と見ねばならぬであらう。

〔唐書西域傳は、隋唐の何國・安國・史國即ち何れもソグダイアナ(サマルカンドを中心とする地方)に位せる諸國を以て漢代の

康居の小王附黑・罽・蘇薤の故地と爲せるも、同傳康居小王故地説の全く出鱈目なるは前述の通りである。若し斯模なことを認めれば、大宛は西南邊に於て康居と接し大月氏と接せぬこととなり、上掲漢書の明文と背馳する譯であり、此宋代記録の探るに足らざることは前述及び後述の通である。」

以上に於て余は大宛國の位置・四邊・都城を明かにした積りである。尤も最初に斷りたる如く其は中亞に於て大月氏國が建設せられたる以後の狀勢に繋りたれば、是を以て月氏の通過時の大宛の狀勢も略々斯の如きものであつたらうと想察し、（即ち之により月氏の大宛通過とは、當時匈奴日逐王の勢力下にして、且水草其他の關係上全く大民族移動不能なりシタリム諸國や、兵疆の康居^{（カザク）}（スタク）を通過せずして、後の烏孫の都赤谷城ナリンコル方面より直ちに西進し、牧草に富む熱海畔・ナルウインスクより葱嶺の續きフェルガナケツテのテレク峠を越え、富みて兵弱きフェルガナの大宛に入り、ウスゲン・ウラチューブ（貳師城？）を経てソグド地方に出でた事と推察される）、且つ之を以て次に大月氏國の位置の比定に資せんとしたものである。

【第六節註】

- ① 洛那國故大宛國也、都貴山城（魏書西域傳）〔洛那が破の字脱落せるものなるは同傳總序其他に破洛那とあるに據りて明〕
 跋汗國都葱嶺之西五百餘里、古渠搜國也（隋書）。寧遠者本拔汗那或曰跋汗、元魏時謂破洛那……（高宗）以渴塞城爲休循都督（唐書）。此の渠搜國は文騰異物志に大頭痛小頭痛山、皆渠搜之東、疏勒之西と見ゆる葱西の渠搜にして、休循の事である。渴塞は Aksī-kat 或は Kasan と考へられてゐる。唐の西域諸都督府に附せられたる古國名が必ずしも其實際の所在地と全然一致するものか否かは疑ふ可きも、斯様な休循都督・大宛都督の如きは少くとも其管轄地内に幾分にても其故地か或は故民を含んでゐたが爲に附された名稱と見ねばなるまい。】

② 漢書李廣利傳には漢將李廣李の宛都進攻に際し一將王申生は數千の兵を率ゐて大軍を離るゝこと二百里、此の東邊域郁成を攻めたとある。然し必ずしも大軍を去る二百里は宛都を去る二百里の同意とは受け取れない。

③ 余は前に「匈奴西移年表・附フン」匈奴に關する再考察」（東洋史研究二の二）に於て、蘇薤を以て通説の如く *Sodai* 或は *Satir-Satir* とせる爲晉書が康居王居蘇薤城とあるを以て、康居が晋代南移せる證としたるも、如斯蘇薤が大宛東方の地たること確定したる上は、晉書の同記事を、匈奴のシルダリア下流北岸地方掩有の結果、康居は中心を東方に後退せる事を物語るものと訂正しなければならぬ。漢武の大宛征伐時に上述郁成王は敗走して康居に逃れたが漢將は追撃、康居に要求して之が引渡しを受けた。之は恐らく郁成がテレク峠を越えてナリンスコに出で、當時東方烏孫は漢の味方に傾いてゐたので、其より北してこの蘇薤の如きに逃れたことを物語るものであらう。

④ 尤も石國は周圍一千唐里の地であり、大唐西域記にも「赭時國（唐言石國）周千餘里。西臨葉。東西狹・南北長。……城邑數十、各別君長、既無總主。」とある程なれば、漢代其地の一部が康居の地であつた事はあつたかも知れぬ。魏書の者舌國の如き或は其嘗て康居の地であつた部分に建ちしものか。

⑤ 史記大宛傳の他の一節に大月氏を大宛の西可二千里とせるは、媽水（オクズ）の南なる大夏を以て大宛の西南二千餘里とせるに徴しても誤ならんは既述せり。之は恐らく張騫（大宛傳は彼の紀行より作られたもの）が大月氏に至るに大宛より康居に送られ、其より大月氏に廻送された結果であらう。彼が大月氏との匈奴挾撃同盟に成功しなかつた爲に故意に大月氏を曖昧に遠西の國の如く報告したとも考へられるが、之は餘り穿ち過ぎかも知れぬ。何れにしても本文は大宛・大月氏の隣接状態を知るに足る史料ではない。

七、ソグディアナ領有とバクトリア支配

(1) *Sogdiana* 領有 前章に於て論證したる大宛の西南境の状態によつても、直ちに大月氏が大宛と境を接し、

嬌水(オクザス)の北方、大宛の都貴山城即ちカサンより約七百漢里の地に王庭を定めたことが解るけれども（尤も之を漢書が、史記に大夏之都と爲せる藍市城と同名と見ねばならぬ監氏城と記せるは恩師羽田博士の論考にある如く誤である）^①更に史記大宛傳・漢書西域傳の大月氏記事を参照すれば彼が其地方に戸十萬、口四十萬の大國を建てたること、即ち大月氏は大體ソグデИАナ地方を領有し、以て嬌南の所謂バクトリアにありし大夏(ソグデИАナ・バクトリア等の名が漢史には全く別の名を以て傳へられし理由は白鳥博士「粟特國考」の考察せられた通りと思ふ)を臣屬せしめた狀態も充分推知せられると思ふ。それにも不拘猶茲に先づ一應月氏のソグデИАナ領有を考察せんとするのは、從來同地方が大月氏の有でなく、却つて（大月氏の中亞移住前及後にも）康居の屬地であつた如き考が相當に有力に行はれてゐるからである。

從來このソグデИАナ地方が康居の屬地であつたと考へる説の根據には大體⁽¹⁾張騫が始めて大月氏に使した時の經路をば史記大宛傳に

（騫）出隴西、經匈奴。匈奴得之。……（單于）留騫十餘歲。……然騫持漢節不失、居匈奴中、益寬。騫因與其屬亡鄉月氏、西走數十日、至大宛。……騫曰爲漢使月氏……、唯王使人導送我。誠得至。反漢、漢之路遺王財物、不可勝言。大宛以爲然、遣騫、發導驛抵康居。康居傳致大月氏。

と騫は大宛より康居を経て、大月氏に至つてゐることを示してゐるから、大宛と大月氏の間には康居の領土が存したのではないか。⁽²⁾而して史記大宛傳は大月氏を以て「在大宛西可二三千里、居嬌水北」としてゐて、大宛より非常に離れてゐる様であるから其間のソグド地方が康居の有であつても少しも情況に不適ではない⁽³⁾殊に隋書・通典・唐書はこのソグド地方を舊康居の地と明記して居、又後漢書に康居に屬せりとある粟弋國の如きも、粟弋の誤字と見得、ソグドが康居に屬した一證と解釋できようと云ふ様なことが擧げられてゐるやうである。

然し乍ら之等の諸理由を検討するに何れも有力なものではない。(此の他にもソグデアナ康居説の諸根據が擧げられてゐるが、其等が何れも妥當でないことは桑原博士「藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む」に明である)^②

第一に張騫が大月氏に至るに、大宛王導譯を發して之を康居に抵し、康居之を大月氏に傳致したことは、必ずしも大宛の西に康居の屬地(ソグド地方が康居の本地でないことは今更論する迄もない)が介在した證據にはならぬ。何故ならば騫は漢と大月氏との二大強國を結びて匈奴に向はしむる大使命を有する使節であり、之が傳致は西域諸國、殊に大月氏と匈奴と兩方に羈事してゐた康居(大宛傳)に取つては大問題である。富みて弱き大宛が兵疆の康居(大宛傳)の意を恐れて先づ之を廻導したのは寧ろ當然のことで(漢武の大宛征伐に康居が宛の爲に援軍を急派してゐるのも康居大宛の密接關係を示す)、又上掲傳文の文意より見ても張騫が康居の邊隅を單に通過した丈けならば決して此の様な記事を載せる譯がない。張騫は大宛より一應康居の都に送られて、再び康居の手より大月氏に渡されたものと見るのが妥當である。第二に大月氏が大宛の西可二千里と云ふ大宛傳の數字が、其より遠い筈の大夏を以て可二千里としてゐるのよりして信憑す可からざるものたるは屢述した通りで、之を以て漢書の明文を否定し得ないのは勿論である。寧ろ此西二千里の數字を生かして考ふれば、之は張騫が大宛より康居王都に廻送せられ、其より又大月氏に傳致せられたる迂迴路③の距離が不用意に大宛傳に傳へられたものと解す可きである。第三に、唐書の康居小王故地説の荒唐無稽なるは既述の如ければ論無しとして、隋書及び通典が隋唐時代の康國・米國・何國等何れも *Sogdiana* 方面に在りし諸小國を以て舊康居之地と記してゐるは全體如何に解す可きかと云ふに、之は同書が其に續けて

其王本姓溫、月氏人也。舊居祁連山北昭武城。因被匈奴所破、西踰葱嶺。遂有其國

と記して居るに據つても、之の舊と云ふのは月氏の中亞移住前の積りで書いてゐるに外ならぬ。繰返し謂ふ如く

史・漢の中亞諸國の記事は殆ど總て月氏の移住後の狀態にかゝるに不拘、斯様に通典隋書の如き唐代所撰書が突然月氏移住前の事情を記してゐるのは甚だ眞否不明怪む可きも、兎に角假りに此記載を以て眞正の事實を傳へし史料と見做せば、之はソグド地方は月氏移住即ち一三三—一二九以前に於ては康居の地たりしも、月氏の移住するに及びて、其地は月氏領となりて、漢書所記の如き大宛・大月氏隣接の事象を致せることを示す史料なりと解する外は無い譯である。要するに後世の史料たる隋書通典の舊康居之地記事は厭く迄怪む可く、假りに之を眞實を傳ふるものとしても、たゞソグド地方は月氏西移前は嘗て康居の地であつたが、月氏の中亞移住によつて其は月氏の住む處となつたことを物語るだけで、決して之が大月氏の中亞移住後に於てもソグド地方が康居の地であつたことを示す資料などには如何にしても見得ないのは云ふ迄もあるまい。

又後漢書西域傳に見ゆる「粟弋屬康居」の粟弋は、成程晋書に「(康居)與粟弋、伊列隣接」とあるのより見ても粟弋の誤であることは推察に難くないが、然しこの粟弋を以て Soghd. Sogdiana と見、後漢代に於てもソグデアナは康居の屬地であつたとするのは妥當でない。何故ならば粟弋は後魏時代には粟特國として寫されたもので、魏書には

粟特國、在葱嶺之西。古之奄蔡、一名溫那沙。居大澤。在康居西北。
とあり、通典には

奄蔡、至後漢改名阿蘭那國。後魏時曰粟特國、一名溫那沙。……………粟弋、後魏通焉。在葱嶺〔西〕。一名粟特在安息北五千里。

とあるもので、北方アゾフ海に臨むクリミア半島の Sogdsk であるからいふ(ソグデアナ地方は別に悉萬斤國(サマルカンド)として魏書に記載

る）。唯、魏書・通典が奄蔡と粟弋を全く同一國と見做してゐるのは、太平寰宇記所引の闕駟十三州志に「奄蔡粟特各有君長」と斷つてゐるのより見て誤で、魏收は其二國が餘りに接近した同類の國であつた爲に誤つて一國と考へたものと思はれる。尤も此十三州志の所記にしても矢張り粟特が南方のソグディアに非ざることを示してゐる。何故ならば、若し粟特が左様に遠南のソグディアであれば、十三州志は何んで態々北國の奄蔡（アゾフ海に臨めるアラビ族の國）と並記して「各有君長」などと注記するの必要があらうかと云ふ譯になるからである。（魏書の粟特國が中心とするソグディア地方に非ずして此の Sogdian なることは、余の既に F・ヒルト博士の論考を證したる處である）^⑤

要するに余は以上の考證に於て、B・C・一三三——一二九、月氏が大宛國なるフェルガナを通過してオクサズの北に移住した後に於ては、漢書の明文通り大月氏國は大宛と境を接し、ソグディアナ（其が以前康居に屬したか大夏に屬したかは確定し難きも）を領有したと解する外無く（かくてこそ後述の如くバクトリア内地に移住したものでない大月氏四十萬の住所も了解出來、又大月氏が遠く北チムケント又はツルケスタン附近に王都を有せる康居を羈縻し得た事情も解る譯であつて）、漢書の明文に背馳して迄も、月氏が中亞に移住した後に於て康居がソグディアナを屬地として所有せる如く解す可き何等の正當なる根據及理由の存せざることを明かにし得たと信ずる。

但し大月氏のソグディアナ占住に關する其以上の詳細なる事情は餘り明でなく、其の王庭も大宛の都貴山城即ちカサンより約七百漢里（其數は漢使によりて稍過少に見積られた）（如く考へられることは上述の通りである）に在つたことは解つても、之が果して Samarkand か否かは解らない。四周に關しては上述の如き東北邊に於ける大宛國との關係の外に、北方に於いてはキジルクムを距てゝ康居に對し、之を羈縻し、東方に於ては所謂南道の國難兜彌賓兩國とアムダリアの大支流 Vakhsh 河

を以て隣し、西方安息(Partia)には數千里四十九日の行程に於て隣し、南は嬌水オクススを距て、Bactriaの人口百萬の大夏に對して、之を服屬せしめむたこと等が知られるのである。是等隣接關係及び大月氏が戸數十萬人口四十萬、勝兵十萬の大國を形成したことを(而も其が後述の如くバクトリア方面に迄は延びあざりしことを併せ)考ふれば之が古の所謂ソグデアナの地と云ふより寧ろ嚴密にゼラフシャン流域、バクシュ・オクスス河北、ウズベキスタン・タジキスタン西半部の地方に占住し(張騫到達時には未だ遊牧生活を営みしも、漢書の記す時代には早くも農耕を営み安息(バルチャ)と同様の文明に達し)居たことを解することが出來よう(尙、上述の隋書通典に見ゆる康國・何國等所謂昭武大月氏の諸國を以て漢代に於ける大月氏の版圖と目し、又其他の後世史料を以てすれば、其疆域も相當詳密に比定し得る。然共既述の如く余は是等史料の眞偽を疑ふものであるから今は唯史漢の記事に従ひて大體を推察するに止む可きである。)

(2) Bactria 支配　斯様にソグデアナを領有した大月氏が南オクススを越えて、バクトリア地方に百萬の人口を有せる大夏を服從せしめたのは、史記大宛傳のよれば、張騫が大月氏に到達する以前に完成せられてゐたから、月氏の西移以後、張騫到達以前即ち西紀前一三三—一二九の間に遂行せられた譯である。

然し乍ら茲に最も注意すべきは、從來の舊説の如くに月氏はこの大夏を征服し其地バクトリアに雪崩れ込んで、こゝに大月氏國を建てたと考へるのは、全く誤であると云ふことである。斯の事に關しては既に桑原博士「張騫の遠征」や、羽田博士「大月氏及び貴霜に就いて」の周到なる論證あり、最早縷述を要せない處である。

要するに月氏はオクスス河北ソグデアナに定住して、河南の大夏を所謂單に羈縻したるものにして、大夏の

分治者たる五部翎侯の如きも、決して大月氏種ではなく、大夏従前の小君長であつたのである。

唯、余は大宛傳に見ゆる大夏(クバル)の都監市城(クバル)には少數の月氏人移住せりと謂ふより寧ろ該市は大夏人の有せる都に非ずして大月氏の離宮或は總督府所在地を謂へるものと見る。何故ならば大夏は、大宛傳に

(大夏)無大王長。往往城邑置小長。……及大月氏西徙、攻敗之。皆臣畜大夏。……其都曰監市城。

とありて、小王五翎侯が和墨城・雙靡城・護渎城・薄茅城・高附城に於て分治し、大君長は無かつた(書漢)のであるから、其等の總首都たる監市城は月氏王の離宮又は總督府と見る外ないからで、張騫が大月氏に使し、漢と共に匈奴を挾撃せんことを勸説せる時、大月氏より更に大夏に迄足を延ばして遂に月氏の要領を得ずして歸つたと

(大月氏)地肥饒少寇、志安樂。又自以遠漢、殊無報胡之心。騫從月氏至大夏、竟不能得月氏要領。留歲余、還竝南山。

も、張騫が月氏王庭より、このバルクなる月氏の離宮又は總督府赴いて勸説せることを物語るものと解せられる。然し乍ら此のバルクに於ける少數の月氏官吏も西紀前二〇年頃に於ける貴霜(Kushan)王朝の諸翎侯統一(10)には、恐らく追放、或は征服の憂目に遭つたに相違ない。

【第七節註】

- ① 羽田博士「大月氏及び貴霜に就いて」(史學雜誌四一の九。一〇—一三頁)。尙、史・漢共に大月氏に王庭の所在を「焉水北」と記してゐるが、之を以て焉水に臨める地と解する必要無き事、桑原博士「藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む」に見ゆ。(安息の如く實際に沿岸の市は臨焉水(大宛傳)と明記されてゐる)

② 藝文七ノ一・一二及東西交通史論叢所載。同博士は大宛の貴山城をコーヂェンドと見られたれば、此のソグデアアナ大月氏領有説も其れに立脚せる箇所あり。貴山城は上説の如くカサンなれば其箇所のみは省略するも、他は従ふ可きである。又監氏城を以て *Samarkand* と爲すことは、しかく理由あることでないこと羽田博士(同上)の論考の如し。

③ 康居の都卑闐城は略今のチムケント、トルケスタン附近に在つた如くである(白鳥博士「康居考」)から、張騫は大宛の都カサンより是に送られ、之より又タシユケントを経て西南向してシルダリアを渡り、所謂饑餓ステツプを越えて *Ḫan* に出てソグデアアナの一市大月氏の王庭に達せるか、或は康居の都よりタシユケントを經、大宛の領内たるコーヂェンド、ウラチユープを經て大月氏王庭に達したかの何れかであらう。

④ 藤田博士「大宛の貴山城と月氏の王庭」が、唐書通典隋書の康居故地記事を信憑使用し、遂に之と史記漢書に(康居の地を奪つたと云ふ記事が見えずして)月氏が大夏を服したと云ふ記事あるとを併行させて大月氏はソグデアアナに入らずして直ちに南方オクズス上流地方に入りて大夏を服屬せりと云ふ説を立てられたのは桑原博士の反對せられた通り妥當でない。隋唐書の記事を以て漢書の記事を廢することの不可なるは謂ふ迄も無いが、假りにこの通典・隋書等の記事を以て信用すべく史・漢の記事の不備を補ふ底のものと思ひしても、其上半部(康居故地記事)のみを援用して、月氏が匈奴に追はれて葱嶺(茲では其一部なる *Fergan Kete*)を越えて直ちにソグデアアナ地方を服屬した如き文意を有つ此下半部の文句をば捨て、用ひないのは宜しくない。又史記大宛傳(上掲)に大宛西則大月氏、西南則大夏の西に注意せよ。

⑤ 拙文「匈奴西移年表、附フンネン」匈奴の再考察(東洋史研究二の一)第六章(C)粟特國の比定」参照。尤も同論文に於ては後漢書の渠弋は、魏書の栗特とは別のものである如く見てゐたが、兩者を別とすべき根據無く之は矢張り通典の明文に従つて同一のものとせねばならず、従つて魏書の粟特國と同じクリミア半島のスグダクと見ねばならぬ。後漢書が渠弋を、康居に屬し且つ其北部に在りし奄蔡(當時阿蘭・聊國)嚴國と並舉してゐる部分に記してゐるのも、渠弋が決して南方の地でなく、阿蘭・聊・嚴國等と共に北方カスピ・アゾフ北岸に存せしことを物語るものである。其國が水土美にして葡萄及び葡萄酒の生産に富めるも亦クリミア半島の地勢に全く一致するものである。クリミア半島は亞熱帶植物殊に葡萄

に富み葡萄酒の名産地である。

- ⑥ 罽賓國の位置。「難兜國」西南至罽賓三百三十里北與休循、西與大月氏接〔漢書〕・「一源西出捐毒之國……河源潛發其嶺分爲二水、一水西逕休循國南、在葱嶺西、又逕難兜國北。北接休循西南去罽賓國三百四十里、河水又西逕罽賓國北」〔水經注〕・「罽賓國」東北至難兜國九日行、西北與大月氏、西南與烏氏山離接〔漢書〕其他の史料より考ふるに難兜の北邊は休循（アライ）の南に接續し、捐毒イルケシュタムより發して西行する Vakhsh 河（Pajā と合してアムダリアとなる。水經注の此の捐毒に發し休循の南を過ぐる一水がバフシ河なるは少しく文面を詳見せば何人も之を認むべし。水經注は同水がパンチャと合してアムダリアとなり安息に至りて西海カスピ雷霧〔acus アラルに注ぐことを續記するもの〕〔アムダリアは古代一分流をアラルに、ウスボイ分流をカスピに送り〕が休循即ちアライ高原の南を過ぎ來れるに臨み、罽賓は更に其西南三百三・四十漢里九日行の地、同じくバフシ川の南に在りしなり。即ち兩國は雨量二五〇—五〇〇ミリ豐饒無比なるタヂクのバフシ南岸地區に在りしなり。（難兜を Dardisan・漢代の罽賓を Kashmir Peshawar Kabul に當つるは非。大夏の東南身毒（大宛傳・李廣利傳）と混同す可からず）。尙、捐毒イルケシュタムの南に接續する無雷國も亦西大月氏に接すと漢書は記るすも、無雷の西は難兜なれば疑はし。
- ⑦ 六姓九姓昭武の地域に就いては白鳥博士「粟特國考」第五章に考證あり。
- ⑧ 翺侯の名は烏孫康居等の北方民族に屢々見らるゝ官號である。大月氏は大夏の土王等に斯様な臣下の官號を與へたのである。

- ⑨ 其他 Eukraidia. Puskalavati. Alexandria. 或は Badakschan の一市とする諸説あるも信を措き難し。（桑原博士「張騫の遠征」註七四・七五）

- ⑩ 後漢書は貴霜王國の建國を、大月氏の西移後百餘年とする。上述の如く大月氏西移は一三三—一二九なれば、是は西紀前二十年頃に當り、Kujula Kadphises の二十歳の頃の事であらう。魏略には「罽賓國・大夏國・高附國・天竺國皆并屬大月氏」と見える。この大夏國・大月氏と貴霜國との異同に就いては卑見を有するも稍本論の岐路に亘れば今は述べぬ。

八、結 語

以上余は、前々世紀より東洋史上の重大問題として研究せられ來りたる月氏民族のバクトリア遷移問題(實質的には寧ろソグディアナ移住問題と稱するの可たるは上述の如し)に對し、特に地理的年代的方面に限定し、紙面の許す範圍に於て、出來得る限り詳細なる考證を加へた積りである。

勿論この事は自然かの Strabon の地理書に見ゆる、Seleukos 家より獨立せる希臘系バクトリア王國を侵奪したスキタイの Asioi, Pasiano, Tokhara, Sakaraula 四族中の何れを、この漢史がバクトリア地方の支配者として記せし大月氏と見るや、將又全く求む可からざるものとするか、^①或又魏書に見ゆる大月氏との史記漢書の大月氏との異同等の問題に關係を生ずるものなるも、是等に就いては他日稿を改めて卑見を開陳し度いと思ふ。(完)

【第八節註】

- ① 本問題に關する從來の諸説は白鳥博士「西域史上の新研究四」(東洋學報三の二)に見る可し。近時の通説(Asioi説)並に其通説の根據の未だ信じ難き事由に關しては羽田博士「大月氏及び貴霜に就いて」(史學雜誌四一の九)の詳論せられし處である(第一節註4所掲諸論文參照)。^②尙、月氏語と謂ひ、或又焉耆龜茲語と主張せらるゝasi 語の asi と云ふ語を焉耆王姓 arjuna に當つるは兎も角龜茲王姓白と結び着けること(N. Fukushima, On the designation-problem of the so-called tokharian language 藤岡博士記念論叢)は龜茲王姓が一に帛として寫されてゐること(晉書載記二・梁書龜茲傳・御覽所引十六國春秋)に對し猶さらに充分の解決を要すべく、之等種族問題に重要な上掲魏略の大月氏及び大夏國・魏書記載の鉗敦(古之貴霜翁侯所治云々・御覽所引後魏書)大月氏等諸國と Xusan との關係其他に就ては今は姑く之を含く。この魏書に見ゆる大月氏に就ては最近松田壽男學士「寄多羅月氏に就いての考」(國史學三三)なる論考がある。